

古代文字の世界(2)

中村雅之

(前々号より続く)

4. 現代文字と同系統の文字

失われた文字の場合には、すでに廃れた書記法を解明する訳であるから、そこには当然ながら相当の労力をとまなう解読作業が必要となる。しかし、古い文字であっても、それと同系統の文字が現在も通行している場合には、解読の労力は軽減される。以下、甲骨文字とパスパ文字を例に述べる。

19 世紀末に発見された甲骨文字は、すぐに漢字の古形であることが認識され、ほどなくしてかなりの部分が読めるようになった。それは周代の青銅器の銘文を研究する宋代以来の金文学の伝統、および漢代の古文字辞典である『説文解字』を研究する清代の説文学の隆盛など、古文字研究の膨大な蓄積があったからである。もしも漢字の使用が過去のある時点で途絶えて、甲骨文字が完全に失われた文字であったならば、その解読には量り知れないほど膨大な労力が費やされたに違いない。

それでは甲骨文字には解読は必要なかったかという、必ずしもそうとは言えない。過去においては勿論のこと今なお正確に読めない字が多く存在し、それらは何人もの研究者によって解釈が試みられてきた。このような“字釈”の積み重ねが甲骨文字における主な解読作業である。このほか董作賓による「貞人」(占いの担当者)の発見もまた解読というに値する仕事であろう。卜辞の中に貞人名が記されていると看破したことが、膨大な卜辞資料の時代区分を可能にしたのである。董氏の指摘が甲骨文字発見から 30 年余り後のことであるという事実をもってしても、この文字の解読がさほど簡単ではないことが承知されよう。

1269 年に公布されたパスパ文字はモンゴル語や漢語などいくつかの言語を表記するのに用いられたが、14 世紀末以降はほとんど人々の目に触れることはなかった。しかしながら 19 世紀に西洋人に“発見”された後、すぐに読めるようになった。それはこの文字がチベット文字を変形して作られたことが一目瞭然であったからである。チベット文字との比較がパスパ文字の“解読”の手続きということになる。これはパスパ文字モンゴル語の話であるが、他の言語を記したパスパ文字の場合は多少事情が異なる。

まず、パスパ文字チベット語であるが、元朝滅亡後も使用され続け、近代の貨幣や印鑑に用いられた。さらに、現在でもチベット仏教寺院にはパスパ文字チベット語の祈祷文が掲げられている所もあり、ある意味現役の文字として機能している。したがって、チベット人にとってパスパ文字は殊更に解読を要しなかったと言えるであろう。

パスパ文字漢語については、吉池孝一「乾隆嘉慶年間におけるパスパ文字銭の判読と蒙古字韻の利用」(『KOTONOHA』46, 2006 年)に興味深い指摘がある。18 世紀後半に、古銭の収集家たちが元朝の貨幣に記されたパスパ文字を『蒙古字韻』を利用して読んだという。

『蒙古字韻』という工具書を用いているわけであるから、ここでも手のかかる解読は特に必要でなく、単に判読と言うべき作業が行われたことになる。ところが、『蒙古字韻』が稀観本であったことから、19世紀半ば以降、西洋人たちは新たにパスパ文字漢語の“解読”に取り組むことになったのである。もっとも既にパスパ文字モンゴル語がほぼ読めるようになっていた段階においては、パスパ文字漢語についても困難を伴う作業は必要ではなかった。むしろパスパ文字漢語の正確な理解には文字そのもの以上に漢語音韻史の知識こそが重要であった。その意味でパスパ文字漢語を初めて正確に読んだ西洋人は英国人宣教師のエドキンズ (Joseph Edkins) であったというべきであろう。1850年代にパスパ文字漢語の示す音形を彼ほど正確に理解した者はいなかった。

パスパ文字は、それが記録する言語によって多少事情の違いはあるが、総じて失われた文字の解読に比すべき苦勞はなかったとことになる。

5. 解読とは何か

暗号解読と古代文字の解読はよく似ているが、決定的な違いは暗号解読には通常読むべき記号と表す言語との間に読み手の予測可能な対応が潜んでいるということであろう。換言すれば、暗号の中の個々の記号は読み手のよく知っている文字の置き換えであり、過激な一種の異体字に過ぎない。例えば、英語のアルファベット(a,b,c…)をそれぞれ何らかの記号に置き換えれば暗号が出来上がるが、十分な量のテキストがあれば、個々の記号の頻度などを調べて解読に至ることはさほど困難ではない。この手の解読としてはエドガー・アラン・ポーの短編小説「黄金虫」(1843)におけるものが有名である。この場合、暗号文は一見でたらめな記号の羅列であるが、よく知っているアルファベットをそれぞれ別の記号に置き換えたものに過ぎない。つまり、一つ一つの記号を何らかのアルファベットの異体字と考えれば、読み手と暗号文との間に言語的ないし文化的な障壁はないと言える。

一方、古代文字の解読には一般に文化や習慣の壁が立ちふさがっている。古代オリエントの楔形文字やヒエログリフなどの場合には解読を阻む巨壁がそびえていたと言って差し支えあるまい。同時にまた、パスパ文字のように容易に読めそうな文字の場合にも、小さないくつかの壁は存在しているのである。

シャンポリオンが乗り越えたヒエログリフ解読の壁について確認しておこう。概説書に幾度も語られた話でありながら、その本質が十分に理解されていないエピソードがある。楯円の枠(カルトゥーシュ)の中に記される人名のうち、エジプト後期の外国人名だけが表音文字で記されると考えていたシャンポリオンが、「ラメセス」や「トメス」というエジプト人名の解読に至ってその誤りに気づき、あまりの感動で気を失い5日間寝込んでしまったという。これについてE. ドーブルホーファー著『失われた文字の解読 I』(矢島文夫・佐藤牧夫訳、山本書店1963年、102頁)は次のように表現している。

彼がこれまで後期の変種と考えていたものが、つまり聖刻文字を音標的に綴ることが、むしろ「古代の文字」の本質的特徴でもあったのだ。

また、レスリー・アドキンズ&ロイ・アドキンズ著『ロゼッタストーン解説』（木原武一訳、新潮社 2002 年、193 頁）も次のように述べる。

シャンポリオンが突如として理解し、この数年間、究明に努めてきた原理とは次のようなものである。ヒエログリフの表音文字はギリシア時代とローマ時代の外国名にのみ限定されるのではなく、それ以前のエジプト語にも広く使われていたという原理である。

これらを読むと、ヒエログリフが古くから表音的に用いられていたという原理に気付いたが故に、シャンポリオンは失神して寝込むほどに感激したことになる。しかし、「プトレマイオス」や「クレオパトラ」が表音的に表記されている以上、「ラメセス」や「トメス」も表音的に表記されるのはあまりにも自然なことで、「謎が解けた」と叫んで失神するほどのことであろうか。

実は、西洋人が「表音的」としか表現できなかったその原理には大きな文化的障壁が潜んでいることに目を向けるべきである。事の本質を日本人にこそ分かりやすい表現で言えば、「ヒエログリフには“音仮名”のみならず“訓仮名”も用いられ、それによって種々の表音法が存在した」ということである。万葉仮名で「やまと」を表記するのに字音を用いて「也麻登」とする音仮名と、訓を用いて「八間跡」とする訓仮名があるが、ちょうどそれと同じ原理がヒエログリフにもあった。「ラメセス」に用いられた「太陽(ラー)」や「トメス」に用いられた鳥「トキ(=トト神の象徴)」は正に“訓仮名”に他ならない。外国人名に用いられたような単純なアルファベットとは異なる表音法を発見して、ついには昏睡状態に陥るほど興奮したのである。

西洋人にとって、アルファベット方式の表音法は予想の範囲内にあるが、“訓仮名”の用法は発想の転換を必要とする大いなる文化的障壁であった。その発見故に感動のあまり倒れたのである。その後、ヒエログリフには訓読み、訓仮名、音仮名の用法があることが明らかになり、完全な解説へと向かうことになる。さらには、同様の原理が楔形文字アッカド語の解説にも応用され、オリエント学が花開くことになる。その意味で、1822 年のシャンポリオンの発見は昏倒するほどの感動に値するものと言えるかも知れない。

古代文字の解説とは畢竟、知られざる習慣の解説であり、文化的障壁の打破に他ならない。